

巻頭言

『ジェンダー研究』22号の特集テーマは「ジェンダーと安全保障」である。安全保障論は国家を主体とする伝統的な国際政治学の分野において、もっとも中心的な主題として扱われてきた。そこでは国防や武器、戦争など、安全保障は軍事化された概念として考えられている。安全を確保するためには力の優位で勝ち抜くことこそが必要であり、国際社会は信頼できない他国によりつねに生存を脅かされる主権国家同士の激しい闘いの場として描かれる。

昨今の東アジアの情勢を考えよう。まさに各国が安全保障の錦の御旗を高く掲げて、近隣国家を敵対視する激しい力の競争を繰り広げている。歴史解釈の違いや貿易の依存度が国家安全保障の問題とすり替えられ、敵対的なナショナリズムが煽り立てられている。そのような隣国との競争と敵対が、国家の安全の確保へと導かれるのだろうか。いやむしろ不安と緊張感を高めているばかりである。戦後の日本は、平和憲法を誇り、平和を守るべき尊いものとして標榜してきた。その特殊な立場から、東アジアの厳しい国際情勢に対案を提示できるはずだが、むしろ敵対の政治に積極的に参加し軍事的競争を加速させている。憲法解釈の変更に加えて、改憲議論も始動させているように。

真の安全保障とは何か。それは、誰もが健康で幸せな生き方を営めるように、その生き方を可能にするために必要不可欠な基本的な条件が満たされた日常を保障することである。そのような日常の安全を脅かす要因は、抽象的な他国の脅威よりも、自国の家父長制、経済的格差、構造的暴力といった身近な社会のあり方にある。その視点に立つならば、本当の安全を確保するためにまず必要なのは、安全保障を考える認識のパラダイムをシフトさせることであろう。そこで、従来の安全保障論に問題意識を持ち認識論的転換を求める新しい国際政治学の潮流が複数生まれた。近年欧米圏の国際政治学で目覚ましい発展を遂げてきたフェミニスト安全保障論（Feminist Security Studies, FSS）がその一つである。FSSは個人の日常上の安全を国際的な構造との関連の中で問うており、その視点は「個人的なことは国際的なこと（The personal is international）」というスローガンにも現れている。国家中心的で軍事化された安全保障論を脱構築し、フェミニズム研究の成果にもとづく対案的な言説を積極的に創出している。

日本でもジェンダーやフェミニズムを理論的な手がかりにした国際政治学がサブ分野として発展しつつあるが、まだ極めてマイナーな研究領域に留まっている。軍事化とマスキュリンな国際政治を前提とする安全保障論が疑問を呈されることすらなく自然化された東アジアにこそ、フェミニスト安全保障論が切実に必要だ。しかし現実には真逆である。東アジア

の国際政治学には「現実主義 (realism)」的な考えが最も力を持っており、その学風が軍事化された政治のあり方を後押しする原因とも言える。

その中、日本政治学会のジェンダーと政治分科会は、2018年度の学会で「ジェンダーと安全保障」をテーマとするパネルを企画した。緊張感に包まれた国内外の政治状況を脱軍事化・脱男性化する知見を見出すためであった。本号の特集は引き続きジェンダー研究の分野に安全保障の議論が広げられることを願って、日本政治学会のパネルの成果をベースとした修正稿と特別寄稿によって構成した。

アレキサンダー論文は、アメリカの戦略的な基地とされたグアムの住民にとって、安全とは何かを問うた事例研究である。基地が生活の基盤となり、住民の生き方を形作っているため、基地がないグアムを想像することができないグアムの人々に、基地はグアムを危険にさらす客観的要因であるにも関わらず、強いアメリカに守られている安心感を与えてくれる。アレキサンダー論文は、グアム住民の安全に対する意識を通じて軍事化された安全保障の矛盾を明らかにしている。

本山論文と和田論文は、それぞれ「女性・平和・安全保障 (WPS)」アジェンダがカナダの外交政策や国連のジェンダー主流化政策の文脈でどのように道具化されたのかを分析した。本山は、WPSアジェンダが国連の安全保障のジェンダー主流化の成果として称賛されたが、これまでの国連政策では、第3世界の女性を性暴力の無力な犠牲者か、本質的な平和の担い手としてしか認識してこなかったと批判する。そのような特定の女性像を強調する言説は、先進国による「遅れた社会」への支配や暴力を正当化する効果を生み出したと論じる。

和田もまた、カナダの保守政権が保守的イデオロギーと相反する性的マイノリティー権利擁護を外交政策として打ち出した理由を、人権が守られない第3世界と比してカナダの優越な立場を確立させようとした保守政権の狙いにあったと分析する。

最後に岡野論文は、主流派国際政治学に対抗する対案を模索する試みとしてケアの倫理のポテンシャルについて考察した。利害を最大化する理性的な強者たちを主体とする国際政治理論を拒んで、「傷つきやすいもの」を主体の位置に据え、国際政治の空間を多様なアイデンティティを持つ「傷つきやすいもの」同士の倫理的関係として再構築しようと試みたものである。

今号は、これら特集論文に加えて特別寄稿を2本掲載した。いずれも主流派安全保障論では取り上げられてこなかった中国の慰安婦問題、沖縄の基地で働く日本人女性達を主題とした論稿である。2本の論稿で扱っているこれら「周辺的な主体」は、いずれも国際政治の動学によって生き方が決められる。抽象的な国家を主体とした安全保障論では不可視化された主体のリアルな生き方こそ、従来の安全保障論を考え直す手がかりを提供してくれる。

これらフェミニスト安全保障論に依拠した研究からどのようなオルタナティブな視点が生まれてくるのか。本号の特集は、答えを出すまでは至らなかったかも知れないが、その議論の土台作りに貢献することができたと自負する。対案に向けた第一歩として、オルタナティブな世界を生きることへの想像力を与えてくれたのではないだろうか。大きな変革は、まだ見ぬ世界を想像するささやかな行為、そのものから始まるのであろう。

2019年7月

申琪榮